時評

佐藤洋一郎　総合地球環境学研究所副所長・教授

バーチャルな人間関係

ＩＴに適応しきれぬ頭脳

「ＩＴ」時代の到来とともに人同士の接触が弱まった。本来、面と向かった人と人との意思疎通を意味する「コミュニケーション」は、電話による会話を経て、いまや電子メールという文字のやりとりにとって代わられようとしている。いまや学校の授業も、キップの売買も、結婚の約束も、何もかもがＩＴである。

バーチャルな関係は研究の世界にも及んでいる。国に金のない時代だから仕方ないといえばそれまでだが、これからは研究所もバーチャルになる。建物がなく、研究者はネットワークで結ばれ、互いに情報を交換する。

なるほど、誰が考えたかすごいシステムだとはじめは思ったが、よく考えると何かがもの足りない。なんだろうと考えたところ、このもの足りなさは、人間の頭脳構造がバーチャルなシステムにまだなじんでいないことに起因するのではないかと思うようになった。

私の研究所にはまったく異分野の研究者が所属している。研究室に仕切りはない。私の前にはハイデッガー専門の哲学者が座っている。その向こうは日本中世史の専門、そのむこうは考古学者、隣りのコーナーには水の専門家がいる。飲み仲間は人類学者だ。動物園のように「アポなし3分」の距離にいろんな専門家が座っているのだからこれほど便利なことはない。

しかも彼らの癖や得意不得意は先刻承知だ。知らない相手なら警戒して教えてくれないことも、ちゃんと教えてもらえる。時には理解不足でぶつかることもあるが、衝突を乗り越えたときに理解が生まれることもある。こうしたことはバーチャルな関係では絶対に生まれないだろう。

人間の頭脳は、何万年もの間に、面と向かったコミュニケーションにあうように進化を遂げては来たが、ＩＴという新手にはまだ十分適応しきれてはいない。真に新しい発見や理論も、面と向かったやり取りの中でこそ生まれるように思う。

このことは産業界でも同じだろう。ＩＴを導入して「経費節減」になったと喜んでいる御社、お宅はそれで新たなビジネスチャンスを失ったかもしれない。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「ＤＮＡ考古学のすすめ」（丸善ライブラリー）など。